

槐かい

平成28年6月号

岡井省二創刊



平成二十八年六月一日発行 第二十六卷第六号 通巻第三〇〇号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

自由

高橋将夫

スランプを抜け出たやうに野火走る
常識にこだはらないで残る鴨
頬と指で感触違ふ猫柳
猫柳毛並のよさを知つてをり



佐保姫が来ておとなしい東尋坊
異次元はこんなところよ春の闇
毎年よ本の付録に紙雛
かいつむり浮いてくるかと疑ひぬ
鳥の恋命かけたる恋はせず
田の中にまだ未踏の地蜷の道
糸切れし風には自由はなかりけり

槐安集

水野恒彦

揚ひばり無縫の天の緩みけり
翁眉の白きが光る別れ霜
礫刑の釘の花冷おもふべし
花月夜大き楕円の中に座す
朧夜の触れてみたきは鯉の髭

加藤みき

行く春や眼らんらん筆持ちて
ゆび編みにオカリナの音日永し
新茶新茶色濃く出でて青臭し
ほんたうに花一つなり一輪草
小鳥逃げ八十八夜過ぎゆけり



中島陽華

八十八はそはちの電話にそそと故郷こくの春
牡丹雪豆腐小僧の目が開いた
スカートスカートの重ね穿きなり春隣
天麩羅を揚げるにもコツ梅三分
こちこちの豆板ありて日永し

竹内悦子

由緒ある石の大壺春の雲
腸あおとに春の足音あおとや掛時計
日蝕は曇り日なりし蛇交む
春の海ひねもす五臓六腑かな
さざなみの美しかりし日永かな

雨村敏子

画仙紙の天地の余白春の鴨
水滴に春水注ぐ玄武かな
白紙に朱筆のゆらぎ春の闇
獅子座の南中ほれ宴の始まり
春の大三角形や松の幹

本多俊子

早春の光となりて銀の針
竜天にのぼり宇宙はさんざめく
夕ざくら花また花の奥のこゑ
もののふの魂やどるかに座禅草
春愁ふ胸に浮くもの沈むもの

近藤喜子

春蘭やまだ恋しらぬ薄みどり
熟睡児のぼかぼかぼかと蝸蚪生る
海神の息おだやかに陽炎へり
鷹鳩と化すや遠くのぼんやりと
花冷や闇に靈気の加はりぬ

瀬川公馨

弥生なり良寛さまのいろは歌
芽柳の淡きみどりにけぶりたる
春雨や甘苦の分かつ処かな
往きに帰りにグリーンアスパラガス
春節や魯迅のせたる手漕舟

久保東海司

嘶けば嘶きこたふ牧は春
啓蟄や騎手なき木馬廻りをり
松苗の神事かしこみ雀の子
存分に日を鋤き込みし春の土
春耕の眞上さだかに鳥の路

柳川 晋

さくら咲く心の準備より早く
灰色の枢機卿灰色の枢機卿IIフランシス・ブーチンの縮名来る涅槃西風
彼岸なり財布の底に六文銭
天地は踏み絵に満ちてをりにけり
日輪の掟の道に抜参

熊川暁子

行くべきか行かざるべきか冬の影
お松明随喜の火の粉熱からず
裏返る空あらばこそ冴返る
老骨の軋む音して半仙戯
地虫出づはじめて使ふ外国語

寺田すず江

地平線に小石投げたる日永かな
しゃぼん玉虹を纏ひて吹かれぬる
初蝶の舞ひてひかりを躲しけり
しがらみをそのままにして草萌ゆる
進化論少し異議あり春の山

岩下芳子

抽んで大僧正の葱坊主

春眠の枕としたる蘭奢待

蘭奢待ニ香木

生涯や入学卒業くり返す

縄張りも空中権も鳥の恋

春風や盲導犬の尾が元氣

近藤紀子

北窓を半分開けてもういいかい

面構へむくつけき猫戀路ゆく

巻きひげのたより無げにも貝母かな

終活を勧める人の春シヨール

春寒や番茶を炒ってをりにける

岩月優美子

永き日や目鼻を探すピカソの絵

綿津見の穂やかなりし鳥雲に

強がりの背なに憂ひの陽炎へり

春愁ふ紅唇しかと古仏かな

夜桜の明かり幽かに能舞台

竹中一花

春筍の真白はみ出す背負籠

菓子鉢に春の山川緋毛氈

モヒカンの子の野遊びや長提

狛犬の霞呑む口呑まぬ口

逝く春を逝くなど止める媼かな

槐市集

有松洋子

鳥帰り新墓ひとつ残りけり
糟糠の妻をこそ恋ふ鳥もぬて
春水に沈む劍山針にぶる
花見酒鬼の笑声まじりぬる
花終へて夢から覚める桜の樹

中田禎子

大神神社や両手にすくふ春の水
霾やゴールドパール流行なる
春風や骨董市の招き猫
参道に東男の春裕
鳥一羽ぶらんこ蹴つて飛びにけり

中谷富子

北窓を開くや神の笑ひ声
かたつむり石の角から進みけり
犬とぬて一人の家居葱坊主
蛇穴を出て四方の空を見渡せり
春燈や追ひかけてをる夢のあり

中堀倫子

二本の相交差して梅の花
春風に焙煎の香りとぎれず
悠悠とパイプをくはふ春の空
直談判と恐さの知らぬ春の猫
三人家族にひとつ余るよさくら餅



橋本順子

緋目高の命透けたり山の池
春潮のリズムにつづく眠りかな
小太りをほめられてをり桃の花
春宵の湾に海亀浮かびをり
春の闇けものの息の潜みたる

前田美恵子

春風に乗りそびれたる木霊かな
閑かさを破る汽笛や無人駅
馬出しの長き土塁や風光る
千年の世を生き抜きし桜かな
春の夢野望の焰消へにけり

柳橋繁子

少将の通ひし道や竹の秋
手を打ちて鯉集まり来日永かな
百名山踏破は遙か花辛夷
ネクタイの固き結び目入杜式
啓蟄の小関越えたる疎水かな

安野眞澄

北窓を開け青き畳の美しく
日照雨してくれなみ増すや牡母の芽
水底に影も流るる花筏
せせらぎの小石のひかる風光る
山法師去りゆき友の声聞こゆ

山田佳子

良き音の柱時計や春の雨
春の雷二度鳴りてより退院す
榛の花横坐りする山羊のゐて
山の樹の大方切られて涅槃かな
百丈石峰寺の峰に羅漢と孕み猫

吉田順子

人待つ間春夕焼の中にをり
暗きより落ちて明るき椿かな
湿原や春竜胆のそそと咲く
みはるかす沖白波や桜東風
春禽の声ちりばめて朝の木々

槐集

高橋将夫選

女みな卑弥呼の血脈月おぼろ 大阪 有松 洋子

海に散る桜は夜に孵化をする
夜の桜時空の外へ散りつつく

性悪な奴と幹抱く桜守

春の風邪大黒様の大薬袋^{だいやくたい}

耕して耕してまた耕せり

暖かやソックス脱いで靴脱いで

春雷は場所を選びて一喝す

わさわさと胸の波打つ木の芽時

春泥の下の歴史よ震災忌

春光のひとりの祈りさざ波す

春霖に遠山の變動き出す

三極や睡たき色の花盛り

鴨引きて月せつせつと湖照らす

山藤の揺れ山霊の息づかひ

菜の花の風にわが身を晒しをり 岡崎 犬塚李里子

黄水仙咲く日輪に触れてより
神の手を零れし畦の犬ふぐり

行き止まるところ曲りて春の水

水草生ふ水の中なる世を覗く

マジシャンのマント危ふし春一番 摂津 中田 禎子

春雷やパズル未完のままなりし

紙雛人をらぬとき飛びにけり

鳥 帰る翼は神に賜りし

宇宙船の行き合ふあたりいかのぼり

啓蟄や螺旋のほとけ回りけり 福井 時澤 藍

つくしんぼ心和める二・三寸

雪吊りの脱ぎても肩の張りしまま

木の芽風からすの会議迷走す

春分や此岸も彼岸も義理人情

銀河往来 高橋将夫

女みな卑弥呼の血脈月おぼろ 有松 洋子
系図を遡れば最終的には同じ祖先に辿り着くのであろうが、作者によれば、女性はみな卑弥呼の血脈だそう。どうりで、女性には強いはずだ。

〈性悪な奴と幹抱く桜守〉の句、世話をやかせた子ほどかわいという。この桜、育てるのによほど手がかったようだ。〈春の風邪大国様の大葉袋〉の句、大国さんの大きな袋の中身が葉だったら愉快。〈海に散る桜は夜に孵化をする〉の句の「夜に孵化する桜」と〈夜の桜時空の外へ散りつつく〉の句の「時空の外へ散る」は神秘の世界。

耕して耕してまた耕せり 江島 照美
「耕す」のリフレインがよく効いていて、リズムミカル。それだけでなく、「耕す」を繰り返す作者の精神の位相を見逃してはならない。例えば、作者は努力家なのだ。また、「耕す」だけで一句を成立させた力量も認めたい。

〈暖かやソックス脱いで靴脱いで〉はかるみの一句。〈春雷は場所を選びて一喝す〉の句の「場所を選んで」や、〈春泥の下の歴史よ震災忌〉の句の「春泥の下の歴史」には大いに考えさせられるものがある。

三極や睡たき色の花盛り 吉田 順子
「三極の花は睡たい色」というのがユニークで、しかも抵抗なく腑に落ちる。

〈春光のひとりの祈りさざ波す〉の句の、「祈りのさざ波」は

作者ならではの精神の風景。

〈春霧に遠山の鬘動き出す〉の句の「動く遠山の鬘」や、〈山藤の揺れ山霊の息つかひ〉の句の「山霊の息つかひ」は、どちらも作者ならではの感性といえる。

行き止まるところ曲りて春の水 犬塚李里子
流れて行く水の行方を見詰めている作者の様子が目に浮かぶ。行き止まったと思ったら曲がって、さらにその先方へ流れて行く。実景かもしれないが、障害があつても先へ進む作者の精神の風景と思ふ。

〈神の手を零れし畦の犬ふぐり〉、〈水草生ふ水の中なる世を覗く〉の句にも共鳴した。

鳥帰る翼は神に賜りし 中田 禎子
翼があるから鳥なのだが、言われてみれば確かに翼は神から賜ったもの。翼に限らず、この世の全ては神からの授かりものなのだろう。

〈宇宙船の行き合ふあたりいかのぼり〉の句の発想に脱帽。真空中の中で風が上がるかどうかはともかく、宇宙船と風なんて想像するだけで楽しくなる。

雪吊りの脱ぎても肩の張りしまま 時澤 藍
雪吊りの端正な姿は美しい。でも、雪吊りをされてる木々にとつては窮屈なことかもしれない。本音が見えて面白い。

〈木の芽風からすの会議迷走す〉と〈春分や此岸も彼岸も義理人情〉の句も併譜。こと、ものの本質に迫っていると思う。
〈以下略〉